

# リチャード・ニクソン暗殺を企てた男

2005(平成17)年6月17日鑑賞(テアトル梅田)

★★★★



監督・脚本＝ニルス・ミュラー／製作総指揮＝レオナルド・ディカプリオ、アレクサンダー・ペイン／音楽＝スティーヴン・スターン／出演＝ショーン・ベン／ナオミ・ワッツ／ドン・チードル／ジャック・トンブソン／マイケル・ウィンコット (ワイズポリシー配給／2004年アメリカ映画／107分)

……いや～、ホントに驚いた！ 1974年2月22日にこんな大事件が起こっていたなんて……。主人公のサム・ビックは決して悪人などではなく、ただ少し不器用で他人へのそして社会への順応能力が不足しているだけ。しかし結果として、家族からも職場からも見放されていく中、彼はとんでもない構想を抱いていくことに……。脚色されてはいるものの、そんな実在した人物の鬱積した内面の気持の掘り下げは、ショーン・ベンの名演技と相まって実にお見事！ こんな映画こそシネコンで大々的に取りあげてもらいたいものだが、観客数は何と6名のみ……？

## いや～、ホントに驚いた！

この映画は大阪ではテアトル梅田でのみ上映されているもの。一度予告編を観たし、新聞広告でも見て面白そうだと思っていたものの、試写会もなかったしチケットもなかったので、つい観そびれていたが、たまたま金曜日の晩の時間が空いたため、この映画館へ。

午後8時55分からの最終上映だが、観客は何と合計6名のみ。明日6月18日の土曜日には『バットマン ビギンズ』(05年)が公開され、きっと若者たちが列をなすだろうと考え、何とも寂しい限り。問題提起型映画と大宣伝コマースリズム型映画との違いという現実をまざまざと実感……。

『リチャード・ニクソン暗殺を企てた男』というタイトルからしてショッキングな映画だが、現実これを観て、いや～、ホントに驚いた！ 1974年2月22日

にこんな大事件が現実には発生していたわけだ。あの、2001年9月11日に発生した同時多発テロは、現実には民間ジェット機が超高層ビルに突っ込んだため、その映像は永久に人々の目に焼き付けられることになったが、この1974年の事件は未遂に終わったこともあり、私たち日本人はほとんど誰も知らなかったもの。

もう1度くり返して言うが、いや～、ホントに驚いた！

## 1974年を中心とした時代のアメリカ

この映画のパンフレットには、1963年から1977年までのアメリカと日本での大きな出来事をまとめた年表が掲載されている。中でもその中心は、「アメリカのシステムに衝撃を与えた10年間」と呼ばれる、1963年のケネディ大統領暗殺から1974年のニクソン大統領辞任までの10年間だ。ケネディ大統領の暗殺後は、副大統領のジョンソンが大統領となったが、その時代の最大の問題はベトナム戦争。

1965年3月に開始された北ベトナムへの恒常的な爆撃の中、ベトナム戦争はドロ沼化の一途をたどり、アメリカ国内では反戦運動が盛り上がることに。そして、1968年10月31日にはジョンソン大統領は北爆の全面停止を命令した。そして「秘策」によるベトナム戦争の終結を訴え、「荣誉ある平和」を国民に約束した共和党のニクソンが11月6日の大統領選挙で勝利したが、そんな「秘策」は存在せず、ベトナム戦争は容易に終結しなかった。

このようにベトナム戦争は一向に収まらないばかりか、1970年4月のカンボジアへの侵攻、1971年2月のラオスへの侵攻と戦争はさらに拡大した。しかし他方、ニクソン大統領は中国との国交回復に大きな功績を残し、1972年2月にはアメリカ大統領としてはじめて中国を訪問した。そんな中で、1972年に行われた大統領選挙に立候補したニクソンは圧倒的勝利をおさめて、2期目の再選を果たしたが、1972年4月には北爆を再開する事態に。

そして、1972年6月、突如発生したのがウォーターゲート事件。これはウォーターゲートビルにあった民主党のオフィスへの侵入の扇動とその隠蔽工作が大問題となり、アメリカ全土を揺るがすことになった大事件だ。この事件は、1974年にはニクソン大統領の側近7名が起訴されるという事態にまで発展し、結局同年8月、ニクソン大統領は任期を2年余り残して辞任に追い込まれるという致命傷

になった。そして1975年4月、フォード大統領がベトナムからのアメリカ人総引き揚げを命じ、ベトナム戦争はやっと終結した。そして1976年の大統領選挙では、共和党のフォードは民主党のカーターに敗れ、「アメリカのシステムに衝撃を与えた10年間」を中心とした波乱の時代が終了した。

余談ながら、ベトナム戦争終結30周年となる今年2005年4月には、ベトナムで盛大な式典が開催されたことは周知のとおりであり、まさに30年という歴史の重みを感じざるをえない。

## 1974年を中心とした時代の私と日本

私は1949年生まれで、1974年4月は大阪弁護士会に弁護士登録をした年。その前の1972年4月から1974年3月までの2年間は司法修習の期間であり、さらにその前の1967年4月から1971年3月までは4年間の大学生活の時代。そして、1971年4月から1972年3月までは、5月の短答式、9月の論文式、10月の口述式と司法試験に集中した1年間だった。

大学生活における3回生のラスト近くの1970年1月26日の21歳の誕生日以降、私は本格的に司法試験の受験勉強にただ1人で取り組んだが、それまでの3年間の大学生活は学生運動に明け暮れた毎日だった。

私が大学に入学した1967年4月以降、学内問題としては「大学の自治」「学問の自由」というオーソドックスなテーマでの運動だったが1967年11月には「佐藤栄作総理大臣の訪米阻止！」という政治的テーマに取り組み、さらに「ベトナム戦争反対！」という大運動の盛り上がりの中、「10・21国際反戦デー」が定着することに……。

そしていわゆる「全共闘」運動に象徴された学生運動はその後一層激しさを増し、その後1969年1月には有名な東大、安田講堂での「攻防戦」が展開された。そして実は後からみれば、これが学生運動のピークとなった……。そんな時代状況の中でアジ演説とビラづくりの毎日を過ごしながら、デモに明け暮れた私だったが、それ以上の説明は、ここでは省略しておこう。

他方、日本では1970年は大阪万国博覧会の年。今は亡き岡本太郎作の「太陽の塔」はその華やかな時代のニッポンの象徴……。そして私が司法試験の受験勉

強に入った1970年1月から10カ月後の1970年11月25日には、あの三島由紀夫の衝撃的な割腹自殺事件が発生した。しかし、1970年6月23日に日米安全保障条約が自動延長とされる中、学生運動は次第に下火となり、1972年の7月7日の田中角栄首相の登場によって、日本は再び新しい時代へと突入していった。そして1973年に石油ショックが日本を襲う中、1974年12月田中角栄首相が辞任したが、その後ロッキード事件が勃発し、1976年7月には遂に元内閣総理大臣の逮捕という前代未聞の大事件に発展した。

このように1970年代のニッポンは激動の年となったが、とにかく1967年4月の大学入学から1974年の弁護士登録までの7年間は私にとって最大の激動の時代であり、その後の私の人生の基礎が固まった時代であることはまちがいない。そんな1974年の2月22日に、この「リチャード・ニクソン暗殺未遂事件」が起こったということを知ったのは実に衝撃的！

### 自由の国、アメリカを実感！

この映画の企画は1999年からスタートしたとのこと。また主演は最初からショーン・ベンと決まっていたが、最大のポイントは、この映画企画・準備段階は2001年9月11日のニューヨーク同時多発テロ以前だということ。

したがって1974年に実際に発生していた、「民間ジェット機を乗っ取ってホワイトハウスに突っ込む」という筋書きのテロ未遂事件の映画化はまだ容易だったかもしれない。

しかし現実に9・11の「あの映像」を見たアメリカ国民にとっては、いくら未遂に終わったとはいえ、「今さらなぜそんな題材を……！」と考えるのが自然で、強い拒絶反応が出るのは当然のこと。パンフレットを読むと、ニルス・ミュラー監督やショーン・ベン自身がその苦労を生々しく語っている。

しかしアメリカが自由の国であることを実感するのは、そんな中、一方では「ある俳優を起用するならば資金を提供してもいい」との申し出があったり、「9・11後、結末を変更すれば予算を保証する」と提案されたけれども、ミュラー監督は、「本当に自分が作りたいと思う映画でなければ、最後まで信念を貫くことはできない」として、断固これを拒否したというお話。

そして他方では、ハリウッドを代表する俳優であるレオナルド・ディカプリオや『サイドウェイ』(04年)でアカデミー賞をにぎわせたアレクサンダー・ペインが製作総指揮としてこの映画に名をつらね、現実的な協力をしていること。またパンフレットを読むと、ショーン・ベン自身も反ニクソン、反ブッシュという自分自身の政治的立場を明確に語っており、そんな自分自身の政治的立場を明らかにしながらの、この映画への挑戦だったことがよくわかる。

この映画はもちろん犯人のサム・ビックを擁護するものでもないし、自爆テロを讃歌するものでもないが、ベトナム戦争やウォーターゲート事件を巡る大統領を中心とした権力の腐敗に対して、ミュラー監督やショーン・ベンが鋭い批判精神を持ち、これを生々しく表現していることは事実。

こんな映画が堂々と製作、公開されることにアメリカの自由や民主主義のふところの深さを私は感じてしまう。

反ブッシュ色を鮮明にしてマイケル・ムーア監督が発表し、カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞した『華氏911』(04年)(『シネマルーム6』124頁参照)についても、その点に関する私の感想はまったく同じだったが、作品の出来からすればこちらの方が断然上。そしてまた、こちらの方が私は断然大好き。さて、あなたはどうか……？

## サム・ビックの人物像は……？

この映画の最大のポイントはサムの人物像であり、それがこの映画のすべてと言っても過言ではないほど。サムを演ずるショーン・ペンはほぼ全シーンに出ずっぱり状態となっている。冒頭ワシントンのバルチモア空港に現れるサムの姿が登場するが、物語はたちまちそこから以前にさかのぼり、サムの人物像に焦点が当てられていく。

サムの人物像を考えるについての第1のポイントは、家族(家庭)面。サムは現在妻と別居中で、妻のマリー・ビック(ナオミ・ワッツ)が子供3人とともに一戸建ての家に住んでいる。サムは妻や子供を愛しており、そして家族(家庭)を大切なものと考えている人物。したがって、別居中であっても妻に電話を入れたり、家を訪問したりと精一杯の行動を示している。しかし……？ その大半は

空回り。そして動けば動くほど事態はより悪い方向に……。そして遂に裁判所から届いた通知にはマリーとの離婚が……。

第2のポイントは仕事面。失職中だったサムは、今日は家具のセールスマンの仕事の面接を受けていた。自分を成功者（勝ち組）と考えているボスのジャック・ジョーンズ（ジャック・トンプソン）はサムに対してセールスマンの心構えを説き、そのための力になると言って1冊の本とテープをサムに手渡した。車を運転する時も、ヒゲを剃る時も、そしてクソをする時も常時このテープを聴けと教えるその姿は自信満々……。しかし客に対して家具を売る時の彼のやり方は……？

第3のポイントは友人面。サムの唯一の友人は黒人のボニー（ドン・チードル）。ボニーは車の修理屋を営んでいるが、もちろん黒人差別をはじめ生きていくための苦労は山のように経験しているが、それを何とか克服しながら日々生き抜いてきたもの。そんなボニーに対してセールスマンとして就職が決まったサムが語る言葉や、共同事業をやろうと持ちかける内容はあまりにも現実離れした夢のような話ばかり。それでもボニーはこんなサムを親友だと考えてくれていたが……。

## ブラック・パンサーとは？

この映画にはサムが接触する黒人組織として、ブラック・パンサーが登場する。テレビでブラック・パンサーの活動家の演説を聴いたサムはその主張に共鳴、同調し、ある日1人でその事務所を訪れ、自分の考え方を説明するとともに寄付金までも……。さらに、彼の提案は「黒ひょうではなく、ゼブラにしたら」という面白いもの。つまり黒人と白人の両方から黨員を募ればその数はすぐに2倍になるというわけだ。そりゃそうかもしれないが……。しかし……？ サムの話を聞く黒人黨員はまったく乗り気を見せないが、このように相手の対応についての理解能力のないのが、このサムという人物の特徴……？

## 理想と現実、そして妥協と墮落

1974年2月22日にこの大事件を起こして死亡したサムは1930年生まれだから、

この時34歳。したがって、もはや若いヤツと言われる時代を過ぎ、一人前の立派な大人になりかけている年なのだから、世の中で通ることと通らないこととの区別くらいはつけないと、と私は思ってしまう。しかし、まったく別の視点から見ると、そんな分別めいたことを言う私自身が、理想を語っていた時代から墮落したのかも……？

いや、しかしそれはやはり違うはず……。現実とは現実、理想とは理想、と考えてそれぞれの立場で矛盾だらけのこの世の中を生きていくことは妥協ではあっても決して墮落という言葉は当てはまらないはず……。

### サムのような人物はいっぱい……？

妻子と別居し、仕事を失う中でセールスマンとして再起を図り、アメリカン・ドリームを目指しているサムのような人物はアメリカにはいっぱいいるはず。そして日本では、一方ではバブル崩壊後の長期的な経済不況の中で、仕事への誇りを失った中年オヤジが増え、他方では戦後60年間の教育問題の矛盾が噴出する中でニートがはびこり、他人との対話ができない若者たちが増えてきた。真面目に生きようとする意欲を持ち、現にそのための努力をしながらも結果としてすべて悪い方向に向かっていくこの映画の主人公サムの姿を観ていると、哀れ、可哀相と思う反面、やはりそれは、お前のせいであって、大統領のせいではないよ、と言わなければダメ……？

そしてまた、日本の今時の多くの若者を見ていると、サムのような意欲も無く、努力すらしめないヤツもいっぱい……？ これでは一体日本はどうなるの……？

それもすべて、2001年4月以降今日まで4年余り続いてきた小泉純一郎総理大臣のせい……？ もっとも、そういう話が現実論にならないところが、平和ボケ(?) ニッポンのいいところかも……？

### ホンモノの犯人の人物像は……？

この映画に登場する主人公サムは、結果的に社会から落ちこぼれ状態となった挙げ句に大変な犯罪を実行することになったが、それまではあなたのすぐ側にいるような、ごく一般的な人物。彼の犯罪の最大の特徴は、その動機を明確に1人

テープに向かって語り、それを残していること。

話している内容はもちろん「その通り！」と納得できるものではないが、そのような考え方が1つの立場として存在しても別に不思議なことではない。また、その語り方も多少は自己陶酔的な感じがあるものの、それなりに冷静かつ論理的なもの。そして面白い(?)のは「レナード・バーンスタイン様、あなたの奏でる音楽のように、すべてが削ぎ落とされた純粋な存在でありたい」という呼びかけ。この呼びかけにこめられた彼の言葉を聞けば、彼がいかにウソをつくことが嫌いでピュアな精神を持った人間であったかということがよくわかる。しかし哀しいことに、そんな人間だったからこそ社会に順応できなかったこともまた明らか。

しかし、社会順応力のなさは、形を変えれば、例えばあの山田洋次監督の最長シリーズである渥美清演じる「フーテンの寅さん」こと車寅次郎も同じ。社会順応力がないため、誰かの助けがなければ生きていけない人間は、この車寅次郎はじめとして世の中にたくさんいるのだが、なぜサムだけがこんな凶悪犯罪を……？

### 「サム語録」の当否は？

この映画はサムの人物像がすべてと言っても過言ではないことは前述したが、サムの人物像は彼がレナード・バーンスタインに宛てた録音テープの中の言葉に明確に表現されている。パンフレットでもそのいくつかを取り上げられ、それを基礎にしてストーリーの解説がなされているが、あえてそれをすべて下記に掲げておこう。

#### 記

- ①「私の名はサム・ピック。アメリカという名の砂漠に埋もれた1粒の砂のような存在です。でも、私に運さえ味方してくれたら、ある計画を実行してこの国の権力者に思い知らせてやります」
- ②「本当にこのままの状態でもいいのでしょうか？ ひとりの男が富を独占しています。アメリカン・ドリームはどこに？ 父や祖父のように、私はその夢をつかみたいのです」



- ③「善人が大勢いるこの国は善良な国家です。でも、こんな時代では何が“善”なのでしょう？」
- ④「独立心を持つことは罪なことですか？ 私自身のボスは私でしかない。でも、この国には今も奴隷制度が存在しているのです。従業員という名前の新しい奴隷がいます」
- ⑤「彼らは何さまのつもりなのでしょう。この星はどん欲な者たちが牛じっています。傲慢なやからには警告が必要です」
- ⑥「正直者はバカを見る。それはかまわない。でも、私は黙って負ける気はありません。自信というのは王者の病です。サム・ピックは王者とは無縁の存在でした。ただ、ウソのない世界を求めただけです」

この言葉をすべてサムの魂の叫びとして受け止めたうえで、その当否を1人1人が真剣に考える必要があると私は思う。そして観客はわずかに6人しかいなかったものの、それほど重要なメッセージをこの映画が観客に送っていることを重く受け止めるべきだと私は考えている。

## テレビというメディアの凶暴さと腹立たしさ！

主人公のサムは毎日のようにテレビでニクソン大統領の姿を観ているが、もちろんこれは遠い遠い雲の上の存在である大統領としての公の姿。したがって、テレビの画面でベトナム戦争について、あるいはアメリカ国民の幸せについて語っているニクソン大統領に対してサムが反発を覚えても、それを伝えるすべなどあるはずがない。今でこそインターネットやメールが進歩し、日本でも「小泉メールマガジン」などが登場しているが、30年前にはそんなものは夢の話。

テレビというメディアにおいては、情報を与える側とこれを受け取る側には絶対的な立場の違いがある。そのことが双方向のメディアであるインターネットとはまったく異なる部分。この本質的問題点は、今年4月に展開されたニッポン放送の株式争奪戦を巡るライブドア VS フジテレビ騒動で明らか。

したがって、インターネットであれば与えられた情報に対して反論があればそれを返すことができるのでストレスになりにくいが、テレビではそうはいかない。見ていて腹立つナ、バカバカしいナと思えば、もちろんスイッチを切ればいいの

だが、それがなかなかできないのが人間の常……。腹を立てながら、またバカバカしいと思いながら、じっとテレビの画面を見ていれば人間の精神状態には良いはずが無く、ストレスが溜まるのは当然。

私も、「某チャンネルの夜のニュース番組」や、「某チャンネルの人気の法律相談番組」などを見ているとすぐにイライラしてくるので、今ではキツパリとスイッチを切ることに……。

この映画では、サムがなぜニクソン憎しとなったのか、そしてまたなぜホワイトハウスに民間ジェット機で突っ込もうとまで思い詰めたのか、についての思考経路はホントはわからないが、テレビから一方的に流れてくるニクソン大統領の姿がその多くの原因を作っていたことはまちがいない。それほどテレビというメディアは、凶暴さと腹立たしさを持たせるものだということをあらためて認識！

## 君はレナード・バーンスタインを知っているか？

私はレナード・バーンスタイン指揮のLPレコードを何枚か持っているが、私にとってバーンスタインはユダヤ系アメリカ人の（クラシック音楽）指揮者というよりも、あのミュージカル映画『ウエスト・サイド物語』（61年）の音楽担当、作曲家というイメージが圧倒的に強い。この作品のブロードウェイ・ミュージカルとしての初演は1957年だが、1961年に映画化されたそれは全世界的に大ヒット。当時中学生だった私にとって、このミュージカル映画は実にショッキングなものだった。

そのバーンスタインのもう1つのミュージカル『キャンディード』（1956年初演）が大阪で上演されると知って観に行ったのは2004年5月。たしかにこれも良かったが、やはり『ウエスト・サイド物語』の比ではなかった。

そのバーンスタインは1990年に亡くなったが、まさかこの映画でこんな風にバーンスタインの名前が使われているとは、映画を観るまでは絶対にわからないもの。それがわかっただけでも、金曜日の晩に6人の観客の1人としてこの映画を観た値打ちがあるというもの……。

2005(平成17)年6月18日記